



新年度研修・基調講演要旨

喜びをもつて働く人になるために(1)

(お話) 日本女子大学教授

久田則夫先生

皆さん、こんにちは。基調講演を担当させていただく久田です。講演に先立って、三つの事業所の事例発表がありました。素晴らしかったですね。三施設の皆さん、それからやまばと学園の皆さんがすばらしい取り組みをされたことが伝わってきました。やはり、事業所や法人の宝は、職員の皆さん一人ひとりだと実感させていただきました。

今、私の手元には、会場におられる佐々木炎先生の本『人命だけでは生きられない(改定版)』があります。実は私は何度も何度もこの本に目を通して読んでいます。この本には、「老いや介護には宝物が秘められている」といったことを初め、読めば読むほど味わい深い内容が詰ま

発行
社会福祉法人 牧ノ原やまばと学園
〒421-0412 静岡県牧之原市
坂部 2151 番地 2
TEL:0548-29-0221 FAX:0548-29-0157
E-mail:honbu@yamabatogakuen.jp
http://www.yamabatogakuen.jp/

機関誌代は無料です。

っているのです、ぜひ皆さんも目を通してみてください。

さて、今日は、「いきいきと喜びを持って働く人になるために」ということでお話させていただきます。最初は、「働く」という言葉について、その意味などを考えてみましょう。

「働く」という言葉、この漢字は、三つの要素からできています。「人」、そして「重」、そ



して「力」の三つですね。それは総合的に何を意味するかという、様々な個性、特性、持ち味を持つている人が、一人ではやりとげることが難しい重い仕事を、各自のタレントや能力、秘められたものを、存分に発揮しながらやり遂げていく、そういう意味が秘められています。

平たく言うと、「働く」の漢字には、三つのメッセージがあるのです。一番目は、職員の皆さん一人一人が素晴らしい個性を持つてるということ。実感しているかどうかにかかわらず、能力、タレントが、既に与えられているということです。

一人一人に与えられている力は、一言で言えば、愛を実現していく力です。人は、個人生活でも、職場においても、この力を発揮していくわけですが、当然のことながら、人間は完璧ではないし、完全でもありません。しかし、不十分だということは、別の見方をすれば、伸びしろがあるということなんです。うれしいではありませんか。幾つになっても、大きな実績や成果を上げたとしても、なお埋めなければならぬギャップがあつて、伸びしろがある。それで、もっといいものにしていくと、ポジ

ティブな姿勢を示せるわけです。「働く」の漢字から学べる二番目のことは、重荷ですね。重荷は一人だけでは重いかもしれませんが、三人、四人、五人で分かち合えば、耐えられるものになります。喜びを持って担えるものになる。業務を適切に分担していけば、喜びが実感できるようなになるといふことです。

働くという漢字は、ニンベンです。重いものを、人が支え合う。さまざまな個性を持つた人が支え合いながら力を発揮していく、そのような漢字の組み合わせになっています。真ん中にある重い業務や仕事を、安心して希望を持ってやり遂げることができるよう、協力し合うことが大切なんです。

今日の事例発表の中でも、意見がいいやすい環境を作ろう、コミュニケーションをもっと密にしよう、そして共に働く仲間を大切にしようという大切なメッセージが伝わってきました。

それから三番目、何のために私たちには様々なタレントや能力が与えられているかという、それは、いいもの、良いものを生み出すため、的確に用いるためです。一人一人が自分のタレントを的確に使うことによって、

全体として、より大きな力になるわけです。それが働くという漢字の中に含まれています。

私は力がないからとか、何々する能力がないからというふうな捉えるのではなく、一人一人が力を持っているので、その持っている力を存分に発揮しながら、共に働く仲間の喜びを、それから利用者の皆さんの喜びを、実現していく。それが、働くという言葉の意味です。

「働く」の英語表現は、work(ワーク)となるでしょう。ワークという英単語は、苦役を人にもたらすという意味を持つLabor(レイバー)とは違って、喜びをもって、自発的、自立的に働く、人のハピネスの実現のために貢献するという意味が、根底に含まれています。英語の意味からも、「働く」は、何かとても良いもの、ハピネスを実現するための取組となります。

私たちは何のためにこの福祉の世界で働いているのかというのと、全ての人のハピネスを実現するためと言えます。そしてこの「全ての人」の中には、当然、利用者も含まれるし、ご家族も含まれるし、将来の利用者、あるいは地域社会の方々も含まれます。そして、職員の皆さん一

人一人も含まれているわけです。

ハピネスについては、これは環境に左右されると言われたりしますが、私は、「本当のハピネスというものは、環境に左右されるものではない」と考えています。働く環境がこうだから、社会状況がこうだから、国の状況がこうだから、ハピネスを実感できないという捉え方ではなく、私たちが関わる物事や、置かれている状況、そして出会う人々を、愛に根ざした観点からとらえることができるかどうかだと受けとめています。ハピネスは選択であり、つくりだしていくものだと考えるわけです。

正しい観点から良い選択をしていけば、私たちのおかれた状況がたとえ不完全であっても、良い関係をつくりだすことができますし、明るい未来や希望、よい職場環境を作り上げていくことができます。

ここで、喜びを持って働く人となるために、三つのワークに取り組むことをお勧めします。

それらは、ソーシャルワーク(Social Work)、ケアワーク(Care Work)、チームワーク(Team Work)の三つです。

これらの言葉の意味について説明しますが、それは、福祉の教科

書に書いてある意味や定義とはやや違いますのでご承知ください。

最初にソーシャルワークについて。ワークというのは、すでに説明した通り、ハピネスを実現していくための取組ですね。ソーシャルには、いろいろな意味がありませんが、つながりを築いていく、繋がっていく、協力し合っていくといった意味があります。組織や機関との関係であれば、完璧ではなくても、喜びや誇りを持って、そこをさらに良いものにするために繋がり、協力し合っていく、それがソーシャルワークになります。

人との関係も同じです。いろいろな個性を持った人が、力を合わせて繋がっていく、そして、つながりの中で出会う人々全てに、ハピネスをもたらすということです。

そのような、ソーシャルワーク、人々にハピネスをもたらすワークは、どうすれば可能なのでしょう？特別なことではありません。朝、「おはよう」と言いますが、心をこめ、思いを込めて「おはよう」と言うのです。

「おはよう」の語源についてはいろいろな説がありますが、「こんな早い時間にありがとう」の意味だそうです。「あなたに会えてうれしい」という感謝の言葉なんです。ちなみに、グッドモーニ

ングは、「よい朝でありますように」「よい一日でありますように祈っています」という祈りの言葉、祝福の言葉とも言われています。なぜなら、今私たちが迎えている朝は、完璧な朝とは限りません。悩み事や、苦しんでいること、辛いことや不安もあるかもしれない。そんな中で、よい朝になるよう、私はいつもあなたのことを覚えて祈っていますよ、という祈りの言葉になっているわけです。(続く)

(注) これは、本年四月開催の「新年度全体職員研修」における基調講演の要旨です。新年度研修の今年のテーマは、「誰もが生き生きと喜びをもって働くために」でした。当日久田先生は体調がすぐれず、Zoomで講演されました。身体の痛みも相当あったようなのですが、終始、明るい声で、力強くお話され、職員一同、深い感銘を受けました。本来のお話の十六分の一位に短縮せざるを得なかったのは残念ですが、講演のメッセージが届きますようお願いいたします。

(文責・長沢道子)



やまばと学園を訪問して

コロナ禍で二〇一九年以来途絶えていた恵泉女学園中高生との交流が、久しぶりに再開。施設のご利用者を初め関係者はみな喜びました。以下、引率の先生と生徒の皆様の感想です。

《生徒の皆さんより》

やまばと学園訪問に参加させていただき、たくさんのお話を学ぶことができました。私が、やまばと学園を訪問した理由は、高校1年生の兄が、障がいを持っているからです。これから大きくなって生活介護施設などに行く時が来ると思うけど、施設の雰囲気や日々の過ごし方を知ることができたので兄にも楽しく過ごしてほしいなと思いました。また、この経験を将来に生かせたらなと思いました。

赤池花歩(中一生)

やまばと学園訪問に参加して良かったと思うことは、コミュニケーションがとりにくい方とも、自分から積極的に関わってあげば交流することができるということを改めて気付くことができたことです。私は高齢者の方と関わったことが少ないため交流の時間に何を話題にすればいいかも分からないという知的障害者の方と言うことで何をしたら良いのか

わからず戸惑っていましたが、先輩の真似をして声をかけてみるとコミュニケーションをとることができていました。この経験をこれからの生活で生かしていきたいです。

明石 恵(中一生)

私がこのやまばと学園訪問で考えたことがあります。それは、人は見ただけで性格を決めつけてはいけません。訪問した初日は、正直とても不安でした。障害者の方々と接すること自体初めてだったこともあり怖い気持ちでいっぱいでした。いざ接すると自分との共通点があつたり、かき氷を渡した時やハイタッチをした時、嬉しいと満面の笑みを私にむけてくれて温かい嬉しい気持ちに自分もなりました。三日間を振り返ってみると、怖いのではなく、私たちと同じように優しい人たちばかりで思った以上に充実した、とても良い経験でした。次に障害者の方と会う機会があつたら、この経験を活かして障害者の方々に楽しみたいと思います。笑顔で接したいです。

荒井 礼(中一生)

今回の訪問で障害者に対する考え方が変わりました。今までは障害者

の方と関わる事がなかったのので、正直怖いというイメージと関わり方が分からず戸惑いましたが、2泊3日でそのイメージが一瞬でなくなり、楽しく障害者の方と関わっていました。「ともに生きる」という言葉の大切さも学びました。すごく良い経験になったと思います。今回で学んだことを活かして心の優しい人になりたいです。

高橋珈子(中一生)

中学一年生の夏に訪問して以来、ずっと行きたいと思っていたやまばと学園に四年ぶりに訪問でき、嬉しかったです。聖ルカホームのかき氷作り、垂穂寮で久々お会いした利用者さんとの交流、かたくりの花での初めてのスノーブレン体験。滞在した三日間は再会と発見の両方があったこととても充実しました。特に職員さんの利用者さん一人ひとりに合わせた声かけやサポートが相互の信頼関係になつていると気づき、心を打たれました。

五十嵐愛(高一生)

やまばと学園訪問では、「障がい」という垣根を超えた人と人とのつながりを学ぶことができました。言葉ではないコミュニケーションの形を知り、本来ある人の温かさに触れ、多くのことを体験し、感じられた三日間でした。無意識の偏見の中で生

きている私たちが、一人の人間として対等に向き合うことの大切さを忘れずにいたいです。

信夫凜子(高一生)

《先生方より》

今回の訪問を希望した生徒は、「共に生きる」ことや「自分たちから出来ること」を積極的に考えたいと思っただけです。戸惑いながらも徐々に理解し動いている生徒の様子を見守り、ほんの数日間の大きな成長を傍で感じる事が出来た有難い時間でした。様々な取り組みの中にあるのは、共に生きるための大きな「愛」。寄り添う方々のプロの技から、多くの事を生徒が感じる事が出来たことに感謝いたします。

佐々木麻紀

四年振りに訪問を実施でき、感謝しております。訪問の度に感じることは、やまばとのどの施設に伺っても共通しています。それは、施設の方々の利用者さんへの接し方が、温かく、優しいことです。当たり前の行動かもしれませんが、簡単に身につくことではありません。ここを訪れる生徒達には、色々な方と触れあう中で、誰もが、神様に愛されている存在であることをしっかりと感じてほしいと願っています。これを伝える大切な場所となっております。

岩村純子

事故から改めて感じたこと

ケアセンターかたじけの花 加藤 智子

連日猛暑日が続いていた七月下旬に坂部の交差点で追突事故を起こしました。ご利用者さん二人を降ろし、ほっとして本部へゆっくりと向かっている途中でした。

週末からの疲労が蓄積し頭はボーっとしていました。今落ち着いて考えれば防止できるタイミングはいくつもあったと思います。体調管理・睡眠を十分とればよかったです。送迎車の運転に不安がある事を伝え、交代してもらえばよかったです。出発前に水分をしっかりとり心に残念な事をもって出発すればよかったです。いづれも後悔が出てきました。

今もフラッシュバックの様にその日の光景がよみがえります。「はっ！」と気づいた時には前の車の後部は凹み、割れたライトの破片が道路に飛び散り、被害者の女性に大きな怪我はありませんでしたが、突然の追突による恐怖で少し混乱している様でした。いつも弱い立場の人に寄り添いたいとその仕事を選んでる私にとって、この様な事故を起

こしたことがとてもショックでした。

事故により改めて感じたのは、私がいかに周囲の人たちに守られ助けられ生きているのかということでした。直ぐに現場に駆け付けずと側においてくれた職員。私の苦しい気持ちを思い、「生きていれば色々ある。大丈夫。大丈夫。」と静かに励まし続けてくれた仲間。いつも一番に私の身を案じてくれる施設長は変わらぬ明るさと元気で事故後の処理を一緒にやって下さり、本当に私の心は救われました。何よりも変わらぬ日常を過ごせる様配慮してくれた職場の皆さんには感謝でいっぱいです。

後日、被害者の方に様子伺いの電話をした時に、「自分自身も若い頃は無理をして身体を酷使しながら仕事をしてきた。だから疲れている時は絶対に運転してはいけない」と教えて下さり、福祉の仕事の大変さに対してとも言葉をかけて頂きました。仕事に慣れ、慢心や油断はなかったか改めて確認する機会にもなりました。頂いた言葉を戒めにこれから気持ちを新たに仕事に取り組んでいこうと思います。

(生活支援員)

安全運転講習会

法人本部 関根 徹

八月三日に交通安全講習会を開催。講師は、四方洋一氏(MS&ADインターリスク総研)で、法人と自動車保険を契約している㈱トップさんからの紹介によるものです。

当法人の自動車契約は、一般的な自動車保険と違い、フリート契約というものです。一般的な自動車保険は1回事故をすると等級が上がり次回から下がった等級の保険料を支払うものですが、フリート契約は、前年の事故による支払い保険金の金額によって(回数ではなく)新しい保険料が決まります(支払った金額が大きいほど保険料が高くなる)。実は、昨年度は事故が多く、今年度の保険料が前年度に比べて二百二十万円の程高くなりました。1.8倍程の値上がりです。

毎年交通安全講習会を開催していましたが、ここ数年コロナの関係で開催できなかったので、久しぶりの開催となりました。

動画による事故発生場面の紹介、データから判明した事故頻発曜日、

時間帯、事故の種類等の説明があり、どのようにすれば事故を防げるか、考えさせる内容でした。

事故の要因としては「うっかりミス」と「不安全行動」によるものがあるとのこと。うっかりミスは「うっかり」なのでどうしようもありませんが、「不安全行動」による事故は、防ぐことが出来るとのこと。「不安全行動」とは、速度を守らない、他者への配慮がないというもので、ルールを守り(速度・一旦停止等)他者への配慮(曲がり角から歩行者がくるかもしれない等の危険予測)をすることによって事故を防ぐことができ、自分や家族を守ることにもなります。

今回の講習での学びを、仕事は勿論、プライベートでも実践できるようにしていきたいと思いました。

なお、お酒が分解されるアルコール検出されなくなる迄の時間は、皆さんが思っているよりも長いことがわかりましたので、お知らせします。「ビール500mlで3.5時間。3本で10時間」。飲む量を調整しましょう。

(障害者部門 事務長)

喫茶ほとりのイベント

生活支援センター 田平 智子

七月二十九日(土)、はじめて、牧ノ原やまばと学園地域交流地域貢献イベント「元島田のほとりD.E.カフェ祭り」を開催しました。

四月に法人内でスタッフ募集をはじめ、五月の参画者会では、各事業所から七名、地域ボランティア四名(島田市社協含)が集まりました。

六月は当事者スタッフへの声掛け、チラシ配布、七月は借置物、テント貼り、駐車場整備など法人内事業所職員及び自治会の皆さまや住民の方々総勢二十名、ウエルシア他五事業所のご協力を頂きました。

当日は、なのはな、希望の家、レタスクラブ、みぎわご利用者六名がスタッフとして参入。

猛暑日でもあり、皆声をかけあつて水分補給しながら店先でワークセンターやまばとのお菓子やかき氷、ランチパックなどを販売。集客は約六十名程度ではありましたが、収益が約二万円、第二回目(9月23日)合わせて年末支え合いプロジェクト資金とし、用途はこれから社協や民生委員と検討し実施予定です。

実施して良かった点は、イベント



に参加された地域の方々から、スタッフの皆さんが自主的に動いていた事に関心を示されたこと、また人前に出る自信がなかった方が次回も手伝いたいと自ら進んで仰ってくださったことです。

障がいの重さに関わらず、自らが住む地域の方々と繋がっていくための自信やコミュニケーションを培う場の提供を、来年も引き続き法人の後ろ盾を受け実施したく思っています。皆さま、どうぞこの機会をご利用くださいませ。(相談員)

EPAに関する報告

垂穂 察 田澤 岳大



八月二十二日～二十四日、EPA生とのマッチングのために、本部署長の関根さんと聖ルカ力のセプティさん、そして私の三人でインドネシアに行ってきました。

垂穂察がEPA生採用に踏み出した経緯としては、人材不足が大きな課題であり、障害分野も外国人雇用を真剣に考えていく必要があると感じたからです。しかしながら会場には、高齢者施設の希望者が八割で、障害者施設は二割程度でした。

介護福祉士を目指すという点で、高齢者分野に希望が出るのは当然だと思ひ知らされ、マッチングの成果に一抔の不安を感じました。また静岡県内の障害者支援施設はEPA生を

受け入れている施設が少ない現状を考慮すると、障害特性の理解をから学びながら介護福祉士を目指して頂く事はEPA生や施設にとっても険しい道のりだと感じました。しかし人数は少ないですが、障害分野に興味があるEPA候補生もいたため、その様な意欲的な人を定期的に雇用し、今後の人材確保等に繋げていきたいと思っています。

会場では二十代～三十代のEPA候補生が沢山みえ、各ブースの説明を真剣に聞いていました。何かと助けて頂いている「(福)三育福祉会」の安河内様が、補佐的な役割を果たして下さり、滞りなく会が進みました。日本を希望しているEPA生の志望動機としては「日本でずっと働きたい」「資格を取りたい」「家族のために働きたい」といった内容等があり、意欲的に日本で仕事をしたいという気持ちが見えられました。

通訳として同行したセプティさんもお大変だったと思いますが、色々カバーしてくれて感謝しています。

EPA生を確保できたかどうか、まだわかりませんが、国籍にかかわらず、よい人材の確保と育成のため、今後も努めたいと思っています。

(施設長)

